

氏 名	マエ シマ ミ ホ 前 島 美 保
学 位 の 種 類	博 士 （音楽学）
学 位 記 番 号	博 音 第 209 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉十八世紀上方歌舞伎音楽の研究－囃子方を中心に－
総 合 審 査 委 員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （音楽学部） 塚 原 康 子
（副査）	〃 准教授 （ 〃 ） 植 村 幸 生
	〃 教 授 （ 〃 ） 杉 本 和 寛
	武蔵野音楽大学 〃 （ 〃 ） 薦 田 治 子
	東京芸術大学 非常勤講師 配 川 美 加

#### （論文内容の要旨）

本研究は、十八世紀上方歌舞伎を支えた囃子方（唄・三味線・鳴物）とその音楽実態について、興行史料や関係史料から明らかにするものである。

江戸幕府開府からおおよそ百年、安定した元禄期を迎え、歌舞伎は飛躍的な進歩を遂げた。およそ千年来都が置かれ文化の中心であり続けた上方と新開の地江戸という歴史の異なる土地柄を背景に、上方歌舞伎と江戸歌舞伎というそれぞれ異なる芸風が確立した。従来その歴史的重要性が指摘されるにも拘わらず、両地域の歌舞伎音楽を相対的に歴史に位置づける試みは決して十分でなく、概して現在にその伝承が続く江戸歌舞伎を中心に研究が進められてきた。近年、江戸後期の囃子方に関する武内恵美子などの研究によって進展が見られるが、依然元禄期や宝暦期を含む十八世紀上方については論証されたことがない。

そこで本研究では、顔見世番付二二一点を中心とする各種番付（辻、役割、絵尽し）、長唄正本、絵入狂言本、台帳等の興行史料と地歌の歌本等に基づき、天和から天明期までの上方歌舞伎囃子方とその音楽について解明し、史的に位置づけることを目的とする。

本論は二部構成をとる。

第一部では囃子方に着目する。史料性格や特徴を踏まえ、寛延以前（～一七五〇）と宝暦以降（一七五一～）に時代を分けて論ずる。寛延以前は、上方に江戸長唄が移入される前の小歌方が中心の時代に相当する。この時期には四一七名の囃子方が確認できる。姓の芸系は見られるものの座組自体は別姓で組織されることが多く、中には役者や屋号を持つ者、能の小鼓役者として知られる者等も散見された。享保期の京では、青木半兵衛と岸野次郎三郎、和歌村藤四郎と嶋野勘七・山本喜市という二組のタテが別々に各座を牽引していたが、宝暦前後を境に多数の主要囃子方が見失われており、上方の囃子方に世代交代が認められる。また上方の唄方坂田兵四郎が享保末年江戸に下ると、長唄正本が版行されるようになる。往来囃子方の移動とその後の変化から、上方が江戸に影響を与えていた様子が窺われる。一方宝暦以降は、上方において長唄呼称が初出し（宝暦五年）、江戸の囃子方が移住する時期に相当する。この時期には四四七名の囃子方が確認できる。屋号を持つ者は減り、担当種目や京大坂という地域別に芸姓の成長が認められる。上方の囃子方を牽引してきた浅田藤治郎、佐野川源四郎、小川徳右衛門ら長期勤続の囃子方が安永末期に見失われると、天明期以降は、上方各座を江戸出身の湖出市十郎、中村富五郎、鈴木万里等がタテを勤めるようになっており、牽引者が在来の囃子方から江戸の囃子方へと交代している。それに伴って、上方においては長唄呼称の定着、江戸の囃子方の芸姓の成長、長唄正本の版行

等様々な変化がもたらされており、天明期以降江戸化が進んでいたことがわかる。

第二部では十八世紀上方の囃子方の関わった音楽実態について、芝居における音楽演出と舞踊・所作事の変遷の二側面から試論的に考察した。絵入狂言本九二作品や『落葉集』（三八六曲）に依れば、元禄期の上り歌舞伎の小歌に関する音楽演出には①出端・丹前・六法、②怨霊事、③大踊の三種が見られ、そのうち①③では二上りが圧倒的に多く、意識的な調子選択が行われていることが判明した。寛延以前の台帳二四作品には、のべ百に及ぶ唄、合方、鳴物の囃子名目が確認されるが、中でも鳴物名目の固定化が早かったことが推測された。ぬめりとめりやすの用法の違いや歌舞伎における琴（箏）の使用例などが確認され、従前の説に検討の余地があることが示された。上方の脇狂言は（四〇三例）、各座固有であった江戸とは異なり興行ごとと変えられ、壬生狂言や地蔵盆など四季折々の市井の年中行事や習俗を多く取り込んだ内容であった。しかし宝暦以降、記載例の減少、内容の固定化等の変化が見られた。盆興行の最後に一座総出で踊られた都風流大踊は（一一四例）、上方の独自の習慣として知られる。合計十から二十の踊の構成に同一のものはなく、各座趣向が凝らされた。音頭には役者、囃子方のみならず、時には観客も参加できた。切子灯籠、提灯、影絵などの舞台演出の下、盆にちなんだ踊も多かったが、宝暦以降になると上演機会が減り、内容も変化した。また安永八年三月大坂角の芝居で上演された「鐘恨重振袖」をはじめとする上方で版行された長唄正本や台帳四点の詞章内容を確認すると、江戸の囃子方の出演や江戸での所演との関係性が見出され、宝暦期以降の江戸化の様相が具体的にわかる。

十八世紀上方歌舞伎囃子方やその音楽実態は、当初初期歌舞伎や中世に淵源を持つ諸芸能、年中行事との深い関わりが認められ、江戸歌舞伎に対して影響を与える存在であったのに対し、宝暦以降影響関係が逆転して著しく江戸化した。「文化東漸」と言われる文化流動現象が、当期の上方の囃子方やその音楽を通じて認められたと結論づけた。

#### （総合審査結果の要旨）

本論文は、18世紀上方歌舞伎音楽を担った囃子方（唄・三味線・鳴物）の動向とその音楽実態を、膨大な興行史料や音楽史料から描き出した意欲的な研究である。

本論文は、網羅的に調査した顔見世番付221点を土台に囃子方の出勤・移動状況を考察した第一部と、それを踏まえて他史料を照合しつつ上方歌舞伎の音楽実態に迫った第二部とからなる。その結果、従来ともすれば江戸歌舞伎と現存の音楽伝承を軸に語られてきた歌舞伎音楽史に対し、史料に基づいて江戸と異なる独自性をもつ上方歌舞伎音楽の生成と東西交流を解明することの有効性を明確にし、第一部では18世紀半ばの宝暦期を面期として、上方の歌舞伎音楽が江戸に影響を与えた時代から、江戸の歌舞伎音楽が上方に影響を及ぼす時代へと大きく転換していった様相を明らかにした。

第二部においては、第一部で解明した囃子方の動向を踏まえて、各種番付・正本に加え、詞章をふくむ絵入狂言本・台帳等の歌舞伎関係史料のほか、芝居歌を収めた上方の歌本などの音楽史料も幅広く読み解き、上方の囃子方の関わった芝居の音楽演出と舞踊・所作事の変遷を立体的に描き出した。ここで取り上げた脇狂言・都風流大踊では、年中行事等とも関連する上方特有の慣習が存在したことが明らかにされ、加えて初期の音楽演出や三味線の調子選択に関する考察でも、新しい知見や通説の見直しを多数提示している。

一方で、宝暦期を境とする囃子方の変化の要因について、役者や演目・興行状況をふくむ当時の歌舞伎界全体の動向に目配りした丹念な説明が望まれること、音楽実態の考察にあたって史料の考証や解釈により一層の慎重さや多面的な議論が求められる部分があること、などが課題として指摘された。しかし、強い問題意識・方法意識をもって研究課題に挑み、新境地を切り開こうとした研究姿勢とその成果は高く評価したい。また、5年にわたる国内外での史料調査からまとめられた囃子方に関する緻密な表の数々は、今後の歌舞伎音楽研究および近世音楽史研究の基盤としてきわめて有用なものたりえよう。

以上を総合して、博士論文として特筆すべき成果をあげたものと認め、合格とする。